

## グレアム・グリーンの『密使』について

### On *The Confidential Agent* by Graham Greene

岩崎正也

Masaya Iwasaki

#### 1

『内なる人』(*The Man Within*, 1929) のアンドルーズは森の中の一軒家でエリザベスに出会うことによって「追われる」から「追う」存在へと転化する一方、Dもまたエルスの死を知ったときに「追われる者」から「追う者」へと変わる。臆病さの点でDはアンドルーズの末裔の一人なのだが、アンドルーズが生から死へ赴くのにはたいして、Dは死から再生に向かうことに成功する。両者の結末を分けたのは「追われる」と「追う」の二重意識の国境にたいする両者の認識の差異によるものだが、この差異を解く鍵は、『内なる人』の上梓以来、つねに「追う」と「追われる」という二重意識のモチーフを作品の中で進展させてきた作者自身の国境にたいする意識の変化の跡を検討することにあると考えられる。

13歳のときにセント・ジョン寮に入ったグリーンは家庭と学校を隔てるラジャ張りのドアを通過するたびに、父と級長をしている次兄のレイモンドに代表される体制側とそれに反抗するいとこのベンに率いられる反体制側との間にあってどちらからも追われる恐怖を抱いた。「私は文明世界をあとにして奇妙な慣習と説明できない残酷さのある未開の国へ入ったのだ。そこでは異邦人であり、容疑者であり、怪しい共犯者のいることがわかっている文字通りの追われる者であった」と述べた<sup>(1)</sup> グリーンの恐怖心は「死よりも恐ろしいものによって追われる男です」と言うアンドルーズの意識の上に色濃く反映している。しかし、弟の「ヒューはグレアムよりもうまく学校生活につき合っていた」ので「個人的な脅迫の犠牲者にはならなかった」とトレーシーは述べている。

#### 2

1939年に出版された『密使』は、全集版の序文と『脱出路』(*The Ways of Escape*, 1980)の回顧によれば、メキシコ旅行の後、『権力と栄光』(*The Power and the Glory*, 1940)の制作と併行して、6週間で執筆されたという。

作品の背景はスペイン内戦を材料にしているので、Dの役割とそれをとりまく人間関係は次のように了解される。祖国にある共和国政府の密使D、その任務と行動を監視するKとミセズ・メンドリル、共和国への反乱軍の密使L。

グリーンが主人公たちを頭文字で呼んだのは、「彼らの衝突の場所を限定しなかつたから<sup>(2)</sup>」であり、同時に、『権力と栄光』の司祭と警部が、それぞれ教会秩序と国家権力の象徴であったように、その頭文字が個人の生と平安を破壊する暴力の遍在を強調する象徴である<sup>(3)</sup>と考えることができる。

戦時の祖国では恐怖以外の何の感情も抱くことができないという状況が、「ここが世界の中で一番治安維持のいきとどいている町」であるロンドンにも現出するからである。グリーンは1930年代のヨーロッパの暴力的な政治危機の現実世界が、作者の意図した「現代のスリラー」としての表現形式をはるかに凌駕していることを、「スリラーが現実に近いのです。おかあさんやこの芝生やおかあさんのサンドウィッチやあの杉の木よりもです<sup>(4)</sup>」とアーサー・ロウを借りて述べている。

45歳のDは祖国での内乱勃発とともに共和国政府から石炭購入契約の密使として任命されたときに、それまでの中世武勲詩『ローランの歌』の研究職という「生」から「死」の位相に入りこんだと考えられる。それは、「戦争という牢獄が人間

を変えてしまう<sup>(5)</sup>」からである。

第1部第1章の冒頭でフランスからの連絡船がドーヴァーに入港したとき、Dはその無名性のために、danger, death, destruction, …という戦争のもつあらゆる属性を他者に感染させる「追われる者」として登場する。それに呼応して、ピーター・ウルフ (Peter Wolfe) が言うように、晩秋のドーヴァー港もまた死のイメージに充たされている。

鷗がドーヴァーの上を飛んだ。霧の断片のように飛び出しては陰にある町の方へとジグザグに戻って行く。そしてサイレンが鷗に合わせて哀悼の気持を表す (mourned) と、他の船もそれに応えて、航跡 (wake) 全体がその声をあげた。だれの死 (death) を悼んでか。船は肌を刺すような秋の夕暮れ (evening) を半速で進んだ。それを見てDが憶い出したのは霊柩車 (hearse) だ。「憩いの園」 ('garden of peace') へ向かってゆっくりと慎重に車輪がまわり、御者は、まるで遺体 (body) が揺れを気にしているかのように、柩 (coffin) を震動させないようにしている。ヒステリーにかかった女たちが横静索 (shrouds) の間で金切声を出した<sup>(6)</sup>

内乱以前のDについての日常は次のように要約することができる。

- (1) Dは『ローランの歌』の写本研究者として大学に勤めている。
- (2) 42歳のとき6ヶ月の休暇を大学からもらって夫婦ともに旅行に出かけるため写真を撮ってもらう。
- (3) その3日後に内戦が起こり、妻は銃殺される。空襲のため崩れた地下室に56時間生き埋めにされる。後日、反乱軍に逮捕され、牢獄に入り、捕虜交換で釈放される。

「恐怖以外の感情を二度と抱くことはないと思います」と言い、「生」を棄てて密使の役割を担ったDは作品の冒頭ですでに「死」の世界に沈潜している。それは彼が「生きている人よりも死者と死に瀕している人の方を愛することができる<sup>(7)</sup>」と意識しているからである。

アンドルーズが「聖者のような顔の白髪の老婦人」が、「母親のようにやさしく手首に包帯をし

てくれ、食物や飲物を出してくれる」ことを願ったとすれば、ローソクの焰に照らされて現れた女が彼を臆病から勇気へと転化させようとした以上、この森の中の一軒家は、「追われる」と「追う」の境界であるという点で、グリーンが幼年時代の日常を過したパークムステッド・パブリック・スクールの校長公舎内の私邸と校舎を隔てるラジャ張りのドアの再現と考えられる。グリーンの二重意識の原初的な国境は、現実生活では作者の成長に合わせて、校長公舎内の緑のラジャ張りのドアに始まり、13歳のときには寮と家庭の境界としてのクローカーの芝生に、31歳のときにはリベリア旅行の途上で「生」と「再生」を分ける「森の学校」に、34歳のときにはアメリカとメキシコを結ぶ国境の橋に進展する。一方、ラジャ張りのドアのイメージは、作品の「地下室」では「原始」と「文明」を遮る緑のラジャ張りのドアとして、「内なる人」では森の中の一軒家として、「権力と栄光」では国境としてのジェネラル・オブレゴン号に、「橋の向う側」のリオ・グランデに架かる国境の橋として、「庭の下」では「生」と「再生」の境界としての地下の洞窟に、再現されている。

Dが救いとしての生への希望を発見したのは、ローズによる憐れみのおかげなのだが、その可能性を与えたのはエルスの献身的な情熱であったとすることができる。「紳士」と思われたDへの献身的な情熱に感動したためにDは、フィリップ少年の「原始」の体系に属するエルスにたいし2度にわたって密使としての「大人」の役割の一部を担わせてしまう。その日の早朝、ホテルに着いてから国際語本部へKと連絡をとるために外出中、部屋の鍵をエルスに預ける。2度目は、帰宅後、部屋のカバンの中を調べられていることに気づき、信任状の隠匿をエルスに頼む。石炭購入契約の商談に失敗したあと、刑事からエルスの死を聞かされたときに、その死に責任を感じたのは、その前日、密使としての役割を果たしたら、安ホテルからエルスを連れて他へ転居しようとしていたからである。その責任を果たすため、エルスの死の首謀者となったホテルの女主人とKとに復讐することを誓う。

これからはおれが追う者に、監視者に、狙撃

者になってやると誓った。<sup>(8)</sup>

「死」の世界に所属するDと対照的に、ローズは「生」の世界に結びつく。Dの臆病さと正直さとに憐れみを抱くローズは死、幻影を信ずることができないからである。「私は男の人に生きていてほしい。死んだり牢獄にいたりではなくて、あなたが死んでいれば1ヶ月も愛することはできないでしょう。そういうタイプの女じゃないわ。あなたみたいに、目に見えない人に誠実ではられない<sup>(9)</sup>」と言う。それを聞いてDはピストルをローズに渡すのだが、これはDが人を初めて信頼した行為だった。

体制側からも、またKと女主人を裏切ることによって祖国の体制側からも排除されている以上、Dはどちらにたいしても救いを求めることはできない。この心象風景をフィリップ少年は無意識の中に閉じこめたまま、国境のランチャ張りのドアを再び押しあけることができずに死ぬ。アンドルーズは、一旦はエリザベスの憐れみにうながされて密輸船団の仲間を有罪にするために巡回裁判の証言台に立つという勇気を示し、また被告に無罪が言い渡されると、仲間の復讐からエリザベスを救うために急いで森の中の一軒家へ戻るという勇気を見せるけれども、エリザベスの死を確めたとき、アンドルーズの責任は、再生への予兆を示すものの、暴力の父の子である自己を抹殺することによって父に復讐を遂げるという内省的な贖罪行為として表現されているに過ぎない。アンドルーズはフィリップのあとを追うようにして「死」に向かうが、Dは「再生」へ出発する。両者の運命を分けたのは責任にたいする認識に差異があるからだが、アンドルーズはエディプス・コンプレックスの中へ逃避したまま成熟することを回避し、Dは、その役割と存在の亀裂に憐れみを抱いたローズの生に責任を負って祖国へ帰還する。ハッピー・エンディングに思われるこの結末と、『権力と栄光』の河港へウィスキー司祭に代って、「背の高い青白い顔をしたやせた」司祭が登場する結末との間には微妙なアナロジーが見出される。

### 3

グリーンが創り出した登場人物が作者の認識の

進展に比例して成長を遂げるものとすれば、アンドルーズとDの責任との係わり方を、作者と生との関係に探ることもできるのではないか。

『ブライトン・ロック』(Brighton Rock, 1938)以降の作品をカトリック小説と呼ばれることに不満を示したグリーンは、作品とカトリシズムの関係に触れて、「すべて私の作品は、オックスフォードでの嘆かわしいほどの1冊の詩集を除いて、カトリック信者として書いてきたものである。しかし、だれも『ブライトン・ロック』出版以前に私が所属した信仰に注目した人はいなかった<sup>(10)</sup>」と述べている。

- |       |                         |
|-------|-------------------------|
| 1926年 | カトリックに改宗。               |
| 1929年 | 『内なる人』出版。               |
| 1936年 | 『地下室』出版。<br>『地図のない旅』出版。 |
| 1939年 | 『掟なき道』出版。<br>『密使』出版。    |
| 1940年 | 『権力と栄光』出版。              |

この略年譜の中で注目すべきことは、アンドルーズから、生一死一再生を体験するグリーン最初の主人公である、Dと司祭の登場までには少なくとも10年の歳月が流れ、その間に作者が企てたリベリア旅行とメキシコ旅行の体験の中に救いとしての「生」への希望が記されている点にある。

リベリア旅行中、ズィギスタウンに着く前にマリリアに冒されたグリーンは同伴したいとこのバーバラ・グリーン<sup>(11)</sup>の献身的な看護により、死の世界から復活したときに、「自己の中に生にたいする情熱的な関心があるのを発見した」と言い、「以前にはこれほどの回心を体験したことはなかった」と回想する。このときのグリーン<sup>(11)</sup>の表情をバーバラは、「巡礼者が聖なる市へ赴こうと願っているようにいとこは海岸地域へおりに行きたいと願っていた」と記している。

メキシコのラス・カサスの写真店では、キリストの像を身につけた婦人の穏やかさにうながされて、グリーンは自分がカトリック信者であることを告げ、主任警部の代表する政治権力の秩序の中に失われたイノセンスを発見し、「まるで異国の町で見知らぬ入口をあけて、中にいる旧友に会う

ようなものだ」とその感動を告白している。

このようにしてグリーンが2度にわたる救いとしての「生」の認識に従って、Dはローズを連れて国外へ脱出するという責任を果たし、司祭は国内に留まるという責任を完了する。「生」と「死」が対峙する国境に佇むグリーンと主人公たちを「追われる」から「追う」基軸へと転回させるのはR-M. アルベレスの言うように、道徳的次元の責任としての勇氣にはかならない。<sup>(12)</sup>

#### 4

成熟することに失敗する子どもの感受性を素材として作家的出発を遂げたグリーンは、1929年に第1作の『内なる人』を発表する。主人公アンドルーズは父親の暴力によって幼年を破壊されたあと、暴力の世界に復讐することに失敗して自殺を図る。幼年の喪失の恐怖を知り過ぎたために成熟に失敗するグリーンと登場人物たちの原型がアンドルーズであり、短篇では、「地下室」のフィリップ少年である。フィリップ少年のような、幼年を破壊されたまま成熟に失敗する数多くの登場人物を扱ったのが『二十一の短篇』(Twenty-One Stories, 1954)である。

1954年に刊行された『二十一の短篇』は、その19年前に発表された『地下室と他の短篇』(The Basement Room and Other Stories, 1935)に収められた8篇の他に、新たに11篇を加えた『十九の短篇』(Nineteen Stories, 1947)にたいしてさらに削除、追加を経て集成されたものであって、その特徴を要約すれば、リチャード・ケリー(Richard Kelly)の言う「とり返しのつかないイノセンスの喪失と、夢に出没する迷子を逆説的に探求するという主題」を扱っている。

「パーティの終り」('The End of the Party')は、隠れん坊をしている最中に、暗闇の恐怖に駆られて死の世界へと赴くフランスの恐怖感を双子の兄のピーターが自己の意識の上を感じる物語である。これから隠れん坊を始めようとするときに、ピーターは、「大きな鳥が翼を拡げて弟の頭の上に影を落とす」のを意識する。子どもの恐怖の象徴は、グリーン自身が一番脅威を感じていた鳥やコウモリによって示されている。

「見つけたぞ」('I spy')では、自分の家のタ

バコ店からタバコを盗み出そうとするチャーリー・ストウは夜半、父がスパイ容疑で連行される途中家に立ち寄るのを見て、「非現実的な存在、青白い、稀薄な、輪郭のぼやけた亡霊」である父の姿にたいして初めて愛情を抱く。

「無邪気」('The Innocent')では30年ぶりに幼年を探しに故郷を訪ねた男が、当時好きになった女の子に宛てたラブレターを隠しておいた門柱の孔を見つける。そこに残っていた手紙の中味が男女の姿態を描写したただの猥褻な絵であることを知って、イノセンスの喪失に改めて気づく。

「橋の向う側」('Across the Bridge')では百五長者で詐欺師のキャロウェイ氏が、リオ・グランデに架かる文字通りの国境にあるメキシコ側の小さな町にいて、対岸のアメリカの町に自分の故郷であるイギリスのノーフォークを夢見ているが、警察の策略にかかって橋を越えてみたものの、幼年を見つけることに失敗し、車に轢かれて死ぬ。

幼年の探究というテーマはその後も数多くの作品に引き継がれていて、たとえば、59歳のときに発表された短篇集『現実的感覚』(A Sense of Reality, 1963)の「庭の下」('Under the Garden')にもまた、グウェン・ボードマン(Gwenn R. Boardman)の言う「失われた幼年という反復的なテーマの神話的変奏」が表れているのは、グリーンに従えば、「わたしの小説の中にくり返し出てくるテーマがあるとすれば、それはおそらくわたしの人生にくり返し出てくるテーマがあるから」である。

#### 5

グリーン作品に見られる愛と憎しみという二重意識の原型は幼年時代の日常の中に認められるが、同時に、そこにカトリシズムの予兆も見出すことができる。しかし、そこでは彼の悪の認識はまだ罪の意識を含んではいない。現実の世界にあって法律の保護からしめ出された罪びとたちに、「生」への希望を与える鍵のヒントをグリーンが抱くにはカトリックへの改宗とそれに続く再生への体験旅行が必要だったのである。作者が強調するとおり、詩集『おしゃべりする四月』(Babbling April, 1925)を除き、『内なる人』の刊行以降、登場人物たちは作者とともに国境を通してさまざ

まな二種の世界の対立に巻き込まれることになった。グリーンは、フレーザー(G. S. Fraser)が言うように、「象徴的なメロドラマ、あるいは文学的なスリラー小説」の作家であるが、作品の特徴はそのカメラ・アイなどの技法に劣らずそのテーマの進展にあると思われる。

フランソワ・モーリアック(François Mauriac)は、「グリーンに於て私を感動させるものは、キリスト教徒であり、カトリック信者であって、すばらしいものではあるけれども、私自身もまた携わった芸術のテクニシャンとしてではない」とグリーン13の小説技法については関心がないことを示しているが、「探偵映画と一連の暗黒小説に、世間の知らぬ『真実』の道を開かせた」点にその価値を認め、最大の意義が恩寵の表現にあることを指摘する。<sup>(13)</sup>

「地獄の存在を信じたので天国の存在を信じるようになった」というグリーン13の逆説的な認識に基づいて、ピンキーは「地獄の責苦もある」と言い、「それから天国もね」とローズ13に言われると、「ああ、多分」と曖昧に肯定するのである。また、『飛行機海賊』(*The Pirate Aeroplane*, 1912)の中に表れる、敵に捕えられたヤンキーの海賊が夜、いっしょにカード遊びをするという、危機に陥った主人公が恐怖からの逃避手段として始めた行為が「司祭」と「警部」の間にも巧みに再現されている。

グリーン13の登場人物が所属するのは、「追う」世界と対蹠的な「追われる」世界である。アンドルーズは密輸船団の仲間と税関吏に追われるものの、もう1人の「追う」者は批評する自我であり、ピンキーとローズ13は不良仲間、警察、アイダ・アーノルドから追われているが、結末では神によって捉えられている、とグリーン13は言う。主人公たちが所属できない「追う」秩序を維持するために政治権力を行使する社会の偽善を非難するのはコンラッドである。ここでは善悪と正邪の二重意識が提示され、そのまま、ローズ13対アイダ13の関係に引き継がれる。この関係はジョン・アトキンズ(John Atkins)から、図式的に過ぎる、と言われているけれども、Dと司祭の臆病対責任のレベルに達するまでの二重意識の中では国境としてのラジャ張りのドアを理解する上で最も説得力をも

つ。

## 註

- (1) Graham Greene, *A Sort of Life* (London: The Bodley Head, 1971), p. 72.
- (2) Graham Greene, *The Confidential Agent* (1939; rpt. London: The Bodley Head, 1971), viii.
- (3) 青木雄造『グレーム・グリーン』(研究社, 1971), p. 159.
- (4) Graham Greene, *The Ministry of Fear* (1943; rpt. London: The Bodley Head, 1973), p. 68.
- (5) Greene, *The Confidential Agent*, p. 115.
- (6) *Ibid.*, p. 3. 死のイメージを示すものとして指摘された英語の中でイタリックのものは筆者による。
- (7) *Ibid.*, p. 152.
- (8) *Ibid.*, p. 130.
- (9) *Ibid.*, p. 171.
- (10) Graham Greene, *Brighton Rock* (1938; rpt. London: The Bodley Head, 1970), vii.
- (11) Barbara Greene, *Too Late to Turn Back* (1938; rpt. London: Settle Bendall, 1981), p. 177.
- (12) 青木雄造訳「グレーム・グリーンと責任」(筑摩書房「世界文学大系」60, 1961), p. 365.
- (13) 窪田啓作、窪田毅弥訳『グレーム・グリーン』(河出書房, 1956), pp. 3-5.